特別支援学級部会（中学校）
提案１　　提案者　光山桂子（川崎地区）

県研究主題
一人ひとりの教育的ニーズを踏まえた教育課程の編成と教育活動の展開の工夫・改善

＜研究主題＞
様々な教育的ニーズがある生徒たちが主体的に取り組むことができる美術の授業の一考察

１、提案内容

知的障害、自閉症・情緒障害、肢体不自由の３学級、計１７名の生徒たちは、それぞれの教育的ニーズをもちあわせている。ものを作ることの楽しさや興味関心、成就感や意欲を高めるために、特別支援学級における美術の時間の内容を考察し、指導に取り組んだ。この実践を通して、作品を大切にしたり、失敗を新しい表現の一つに置き換えたりしながら、制作することの楽しさを感じられるようになるとともに、準備や片付け、自信を持たせることなどの新たな課題を見い出すことができた。

（1）実態とテーマ設定

知的障害、自閉症・情緒障害、肢体不自由の生徒たちは、①教室を出てしまう、②苦手意識が強く作品にすることができない、③なかなか発想が浮かばない、④一つひとつの動作にサポートがいる、⑤一度作り出すと自分勝手に作ってしまうなど、様々な課題があるが、比較的軽度の障害であるため、美術に関しては集団で授業を行っている。一人ひとりに対応ができる課題や内容を工夫し、興味関心を高めることができる内容を考察した。求める生徒像として次の３点を掲げた。

①多くの生徒が積極的に授業に参加している
②途中で投げ出すことなく、自分の作品を完成させる
③教室内で展示したり、家に持ち帰ることを嫌がらない

（2）指導内容

題材１　１０分間スケッチ（クロッキー）
内容：ぼかした画像、次に鮮明な画像を映し出すことで輪郭線をしっかりととらえる。
成果と課題：毎時間の定着で描きやすくなるが、苦手意識も出てくる。

題材２　レタリング
内容：５０インチテレビを活用して明朝体とゴシック体の違いを明確に捉える。
成果と課題：意欲を持ちにくい内容だった。

題材３　モダンテクニック
内容：偶然にできた形を楽しむ。
成果と課題：前向きに取り組んだが、道具や用具の片付けに指導を要した。

題材４　軽量粘土のモビール
内容：完成品を見ながら、泥遊びのように感触を楽しむ。
成果と課題：粘土の感触を楽しむ生徒もいれば、触ることができない生徒もいる。

題材５　金地に花を描く

内容：金銀の折り紙に耐水性のあるアクリル絵の具で見本の絵のように描く。

成果と課題：修正から金が銀になるなどの方法を知り、失敗を楽しみ、新たな表現につなげた。

（3）今後の課題

以前に比べると作品を完成させる生徒が増え、授業の準備や片付けにも積極的に取り組むようになった。自分の作品を誇らしげに見せることができるようにもなった。まだまだ苦手意識　をもっている生徒がいるが、うまい下手にかかわらず、教員も生徒とともに楽しむことで「のびのびと表現することの楽しさ」を実感できるような題材や手立てを探っていきたい。

２、協議内容

テーマ：一人ひとりの教育的ニーズを踏まえた特別支援学級としての集団指導

３０分間のグループ協議のあと、各班ごとに発表、協議となった。全員一緒で同じ作業で教え合い、助け合いができる。うまく取り組みができない生徒に対して→「大丈夫だよ」などの声かけが大事である。

助言

特別支援学級の授業であっても専門の技能教科の先生が指導してくれることは、専門でない教員が指導するよりも、題材のバリエーションがあり心強い。しかし、専門性と支援の視点を持ち合わせることが必要である。個々の生徒たちに対応していくことで、意欲や自信を持たせることができる。また、多くの学校であるように、授業に支援員の配置があったり、TT での指導形態であったりすることで、より細やかな気配りのできる授業になるであろう。集団で一斉指導するとともに、いろいろな形でのグループ学習をすることで、教え合いができたり、作品の鑑賞を通して、褒めたり認め合ったりすることができるであろう。

また、できるできない、うまいへたではなく、みんな同じ存在であることに視点を置いた学習を行うこと、授業の前後の準備や片付けをしっかりする学習を行うことは、社会性を身につける場にもなる。

まとめ

学校事情や生徒の障害の重さによって、授業の形態は様々だが、一人ひとりの教育的ニーズをふまえて支援レベルを考えていく必要がある。「教師と一緒でないとできないレベル」から「ひとりでできるレベル」まで、細かく段階を踏んで、どのくらいのレベルでできるか指導者の目線を鍛えなければならない。

自立活動の中で、あるテーマを持ってみていくと生徒の見取りが深まっていく。そして、集団でうまくいくようになると、その生徒ががんばれる場面を設定して実践できるようになる。

提案２

提案者　磯崎　睦美（足柄上・足柄下地区）

＜研究主題＞　生徒が自立を目指し、生活上の困難を改善・克服するための指導の充実
～　自力通学を目指しての指導をとおして　～

１　提案内容

道路の歩き方や信号の見方などは分かっているが、一人で出かける経験の少ないＢ児の行動範囲を広げ、将来に向けた自立につなげるため、一人での外出、特に自力通学を目指し、取り組んだ実践報告である。

（1）テーマに迫るための具体的な手立て

まず、個別指導計画の中に「自力で下校できるようになる」を位置づけ、学習計画を立てた。そして、事前に一番安全な通学経路を決め、実際に渡る踏切の調査を行った上で、4 点の手立てを考え、それぞれに課題達成までの、細かいステップを設定した。

① 一人で安全に横断歩道を渡れるようにする。
下校時に実際に渡る横断歩道で、左右を見て、車が来ないこと、車が見えたら手を挙げて、車が停止したのを確認することを学習する。

② 一人で安全に踏切を渡れるようにする。
疑似体験のできる踏切を校舎内に作製し、警報機や遮断機の確認と対応の仕方を繰り返し学習する。警報音は実際の CD 録音を流す。

③ 体力をつけ、余裕を持って通学できるようにする。

④ 困った時に助けてもらえるように自分から言葉を表出できるようにする。

（2）指導の実践・・・（1）①～④についての具体的な学習の様子

① 保護者、支援員の指導に始まり、後方からの担任の声かけ、見守りという形に移行し、学習を進めた。スムーズな左右確認動作のため、メトロノームでの練習も取り入れた。

② 下校の前に下校時と同じ態勢で、警報音や遮断機のいろいろな場面を想定して学習。その後、実際に付き添い下校をして指導する。

③ 体育や自立活動の時間に持久走、縄跳び、ｻｰｷｯﾄﾄﾚｰﾆﾝｸﾞなどで体力、走力を鍛え、立ち止まらずに歩ききる力をつけた。

④ 道徳や学活の時間に、絵カードの使用や場面設定により、適切に挨拶・お礼・お願い・謝罪・困ったときの言葉が言えるよう学習した。作業や職業・家庭の時間には作業の報告をするなど、日常生活の場面で、自ら言葉を表出できるよう学習を続けた。

（3）成果と課題

日々、運動を取り入れることで体力がついた。踏切の疑似体験により、いろいろな場面を経験し、混乱なく実際の場面にも対応できた。付き添い下校時に周囲の状況を説明したので、環境の把握ができた。横断歩道や踏切の横断で変化する状況を的確に判断し、安全に渡る力が身についた。挨拶、報告を中心に自分の思いを言語で表出できるようになった。

課題の第１は、歩道を渡る際の確認動作が大きく、時間がかかること、また車に止まってもらえないことである。第２は困ったときの対処の仕方について、保護者との相談が、十分できていないこ

とであり、第3は、今後、買い物や交通機関の利用ができるようになるために、他者との関わりや集団参加など人間関係の形成に取り組んでいくことである。

２　協議内容

「自立と社会参加に向けた教育課程上の取組」を協議の柱に設定し、研究協議を行った。

（1）　参考にしたい点

子どもの将来を見据え、今付けておきたい力について、保護者ときちんと話し合われている。自力通学という目標のために計画が綿密に立てられ、スモールステップで実践して、その都度評価がなされている。手作りの踏み切り模型を校内に設置して練習するなど、教材の工夫がすばらしい。体力をつけるために、体育で持久走を行うなど、学校のあらゆる教育場面が総合的に活用されている。保護者の思いを受け入れ、保護者の協力、信頼を得ている。

（2）　工夫・改善のためのアイデア　　～自校での取組等を踏まえて～

子どもの「〇〇したい」という思いがあると実践をスタートしやすいだろう。思いを達成するために必要な課題が明確になり、取り組みやすい。校外学習時には、個々の特性に合わせ交通機関を利用するようにする。他の生徒と行動を共にすることで、良いモデルとなり、他との関わりも持てる。困った時、予想外のことが突発的に起こった時に助けを求められない子どもについては、その子どもの情報を手帳などに記し、それを見せることを指導するのも良い。また予め、駅、交番、バス会社やお店などと打ち合わせを持ち、地域の協力を取り付けるのも良い。確実に、安全にできるところから少しずつ　　行うのが良いだろう。そのためには、教師、支援員、保護者のチームワークが大切である。保護者会などで、自立のために必要な力について情報交換してもらうのも、保護者にその取組を促すきっかけになるのではないか。

（3）　自立と社会参加に向けた教育課程上の取組

教育活動全般との関連性を持って、計画が立てられている。自立活動の観点に沿った学習目標を設定し、課題が明確であり、項目ごとの関連性がはっきりしている。

（4）　助言

事前の学校見学で、B 児と先生との信頼関係が強く結ばれているのを感じた。信頼関係こそが全ての教育活動の土台となることをまず確認したい。今回の自立活動を主とした取り組みについて、内容と指導計画が作成されているが、視覚的にも大変分かりやすい。また、他教科や他領域、日常生活との関連が明記され効果的に指導が行われたことが分かる。綿密な調査によって手作りされた「踏切」は B 児の学習への意欲を引き出している。生徒の実態に応じた教材・教具作りは大切である。今後の課題として、「生徒の綿密な実態把握」と「来るべき就労を見据えての指導」が挙げられる。小学校と連携した９年間通しての「個別の支援計画」を作成し、点検・改善をしていくことが大切。

３　まとめ

・中学校特別支援学級における一斉授業への模索（個別対応から集団へ）

・平成 18 年　障害者の権利に関する条約　24 条　教育の規定についての説明

・平成 22 年 中央教育審議会　特別支援教育の在り方に関する特別委員会より

①ｲﾝｸﾙｰｼﾞﾌﾞ教育システムの構築に向けた方向性　②就学相談、就学先決定の在り方

②合理的配慮についての検討の必要性　④教職員の確保及び専門性向上のための方策

文部科学省のホームページをご一読いただきたい。中学校特別支援学級の授業はどうあれば良いか確認し、子どものニーズに合った授業ができるようにしたい。